

〔学 会〕

東京女子医科大学学会 第165回例会

日 時 昭和45年12月4日(金)午後1時半より
場 所 東京女子医科大学本部講堂

1. 臨床材料から検出されたブドウ球菌の薬剤耐性分布について

(中検細菌部)

○池田 洋子・渡辺 節子・大橋 節子
小林伸太郎・長田 富香

近年化学療法の普及に伴い、多剤耐性ブドウ球菌は著しい増加を示している。われわれは先の36回総会において、最近2年間に中検で分離したブドウ球菌の諸性状と病因性について報告したが、今回は更に薬剤耐性分布について検討した。ブドウ球菌の病原性はコアグララーゼ産生能と最も密接な関係にあるので、臨床材料から分離した2,400株のブドウ球菌をコアグララーゼ陽性群と陰性群とに分けて、8種薬剤についての耐性度を比較検討した。

1. 各種薬剤に対する単独耐性率を見ると、コアグララーゼ陽性菌はPCに70%耐性、CMに70%感受性を示したが、コアグララーゼ陰性菌はPCに70%感受性、CMに70%耐性を示した。

2. 2種以上の薬剤に重耐性を示す割合を見ると、コアグララーゼ陽性菌においては73%で、そのうち2重耐性が最も多く23%であったが、コアグララーゼ陰性菌においては重耐性を示すものは83%で、そのうち6重耐性を示すものが最も多く18%を示した。

3. 入院患者から分離した菌と、外来患者から分離した菌について耐性度を比較すると、コアグララーゼ陰性菌において外来菌では1剤耐性が24%で最も多く、重耐性を示すものは71%であるが、入院菌では6剤耐性が最も多く25%で、重耐性を示すものが92%を占めた。

4. 検体別に耐性度を比較すると、膿ではコアグララーゼ陽性菌・陰性菌ともに1剤耐性が最も多く20%であるが、尿ではコアグララーゼ陽性・陰性菌ともに6剤耐性が最も多く20%を占めた。之に対し咽頭および喀痰ではコアグララーゼ陽性菌は2剤耐性が最も多く30%を占め、コ

アグララーゼ陰性菌では6剤耐性が最も多く30%を占めた。

5. 科別に耐性度を見ると、コアグララーゼ陽性菌は耳鼻科の分離菌は7重耐性を示すものが23%で最も高く、コアグララーゼ陰性菌では婦人科の分離菌が6重耐性を示すものが29%で最も高い耐性分布を示した。眼科においてはコアグララーゼ陽性菌、陰性菌ともに重耐性を示す割合が最も少なかった。

2. S電位の色光応答曲線

(第一生理)

○柴田 三重・橋本 葉子・渡辺 宏助

色覚に関しては、これまで心理学的研究が主流であったが、最近の生理学的研究から色覚情報の大部分は末梢機関である網膜で処理されていることが明らかとなった。そこでわれわれはヒトの網膜に構造的に類似して、しかも色覚を有する鯉の網膜について、色識別機構のモデルを構成していこうと考えている。

電顕の研究から脊椎動物の光受容器は、双極細胞と水平細胞とにシナプスを介して結合していることが明らかにされているので、色光情報に対する鯉網膜の光受容器電位と水平細胞電位(S電位)の関係をアナログコンピューターを用いたイミュレーションによつて調べてみた。

超微小ガラス毛细管電極を用いると、人工呼吸下の眼球盃標本からS電位が誘導される。そこで、3型(L型、RG型、RYB型)のスペクトル応答曲線について、それぞれ特定な波長(三種の光受容器の最大感度波長)の背景照射光を加えて、スペクトル応答曲線の変化を求め解析した。

その結果を基に、受容器電位が、S電位に寄与する割合をS電位スペクトル応答曲線の各型個有の係数として求めた。背景照射を加えることによつて、背景照射光の波長に最大感度のある光受容度の係数が一番小さくな